
カーネーションとインチョと腹ぺこな俺

高田高

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

カーネーションとインチョと腹ぺこな俺

【コード】

N1978E

【作者名】

高田高

【あらすじ】

母の日にカーネーションを買いに花屋へ。ただそれだけの五月十日。

外は陽気どこか、真夏日並のカンカン照り。

お陰で車内はサウナ状態で、吹き出す汗が接着剤代わりになり、シャツがうっとおしく張り付きやがる。

俺はウインドウを開放し、外気を車内に流しながらステアリングを操作する。向かう先は、花屋さん。

花屋さんとはなにか？

そんな事は知ってる。様々な種類の花が売られている店の事だ。現在向かっている所も、一般常識に外れない、普通の花屋さん。ところで、なぜ花屋に向かっているのかというと、今日は五月の十一日。

母の日というやつ。

テレビCMをアホ面しながら見ていると、目に映ったのは『母の日にカーネーションを贈ろう』という、期間限定キャッチフレーズ。そのキャッチフレーズを目にした時、一度も母にカーネーションを贈っていなかった事に気付き、仕事も休みでやる事もないし、たまにはサプライズもいいたらうと、気の迷いが起きたわけだ。

目的地を発見すると、サイドブレーキを引き、ステアリングを豪快に回転させ、タイヤをスリップさせながらドリフト駐車。など出来ようものか。

乗用車四台分の狭い花屋専用駐車スペースに、安全運転で愛車を駐車させる。

少しばかり隣のスペースに侵入してしまったが、そんな事は気にしない。

お世辞にも広いとは言えない店内には、様々な花がっぼみを膨ら

ませている。

その中にはサボテンなんてのもあるが、サボテンにも小さな花が咲くわけだから、“花”の部類にねじ込んで構わないだろう。

第一、カーネーションを買いに来た俺には、サボテンなんぞどうでもいい。

「すみません」

カウンター奥で作業していた女性店員に声を掛けると、こちらに気付き顔を上げた。のだが、俺を見つめたまま停止している。

急に顔を上げたせいで、頭のネジでも外れたか？

「あの？」

「あ……あー！」

店員は俺を指差し、そんな声を上げてくれる。

世の中には不思議な、いや、変なやつは多い。

「あははは！ 久しぶりだねえ！」

店員は笑いながら、俺の肩をバツバシ叩いてくれている。

痛み以上に、理解出来ない状況に頭がこんがらがり、ほうけた顔を浮かべた。

「え、嘘？ まさか忘れたの？ インチョだよ！」

インチョ……。懐かしいアダ名だ。

眼鏡におさげ髪の、毎年委員長を任せられる損な容姿から、付いたアダ名が『インチョさん』

中学時代の同級生だ。

「あー……懐かしいな。インチョ、眼鏡どした？」

「コンタクトよ、コンタクト」

どちらかと言えば地味な印象だったインチョだが、ロングヘアーを茶色にカラーリング、薄く化粧なんかして、ピンク色の口紅を塗ったりなんかして、まるで別人だ。

「んで、君は花屋に何用かね？」

「花買いに来たに決まってるんだろ。それとも何か？ 花屋に飯食いに来るやつでもいんのか？」

「わかんないよー。喫茶店にメイドさんがいるくらいだからねえ。花屋兼料理屋とか、あるかもよ？」

インチョの見せる、にひひって感じの悪ガキのような笑顔に、俺の心は一瞬あの日に戻った。

あれは、中学の二年くらいだったか。

学校帰り、高校生に絡まれた俺を見つけたインチョは、鞆を振り回しながら駆け寄り、俺の手を掴むと猛ダッシュ。

逃げていたはずが、いつの間にか徒競走に。

今思い出すだけでも、にやけてしまう。

『男なんだから、ビシツと言ってやりなさいよ！ ね？』

そう言って、にひひってな感じに歯を見せながら笑ってたな。

あれが初恋だった。

女々しい事に、今も初恋は初恋のまま。

「おーい？ お客さん、話聞いてますか？」

「あ？ ああ、聞いてなかった」

「だからさあ、どんなお花が入り用かね？」

カーネーション、と答えるとインチョはカレンダーに目を向け、
両手をぱんと叩いた。

「ママンにプレゼントかな？」

「イエス、レディ」

互いに馬鹿な事を言ったと思い、くすくす笑う。

ふと、インチョの左手に目を向けると、薬指の付け根に銀色の指輪がはめられている事に気付いた。

「インチョ、それ」

「ああ、これ？ 二年前に結婚したの」

初恋は叶わない、か。

よく言ったもんだ。

「お幸せで？」

「うーん。普通？」

そうは言っても、隠し切れないのか、インチョはにやにやと口元を緩くしている。

「子供は？」

「十月に一人目が産まれる予定」

そう言いながらインチョは、腹部を摩りながら幸せそうに微笑む。好きな、いや、好きだった人が幸せなら、それでいいか。

「じゃあ記念にカーネーション、タダにしてくれよ」

「ははは、ダメだよー」

カーネーションを二本買い、俺は店を出た。とは言っても持っているのは一本だけ。一本は未来の母親にプレゼントしてやった。

我ながらロマンチックな事をしてしまったと思ったが、インチョは微笑みながら『ありがとう』って言うてくれたし、まあいいだろう。

帰り道。十余年越しの初恋がアツサリ終了した俺だったが、悲しいとか悔しいとか、そんな感情は起こらず、ただ、自然と笑みがこぼれる。

人間、歳取ると丸くなるとか言うが、全くもってその通りだ。

インチョが笑って過ごせるなら、隣にいるのは俺じゃなくても構わない。

なんて考えている自分に苦笑しながら、カーステレオから流れるノリノリのHIP-HOPを口ずさむ。

途中、マイカーが腹ぺこサインを出したため、近場のガソリンスタンドに寄る事にした。
ついでに俺も腹ぺこだ。こんな事なら、花屋で飯食ってけばよかった。

「いらつしゃいませー！」

「レギュラー満タンで」

対応した女性店員に、会員カードを差し出す。が、どうにも俺の顔が気になるらしい。

店員はにんまり笑顔を俺に向け、どこかで聞いたような一言。

「久しぶりだねえ！」

神様ってやつは、サプライズ好きらしい。

それにしても……

腹減った。

(後書き)

読んで下さった方、ありがとうございました。 え？ 終わり？ って感じでしたか？ 終わりです。この後彼は、何事もなくコンビニで弁当を買うのでしょ。腹ぺこですから。ちなみに主人公である俺の考え方、感じ方は、もろ作者です。エッセイに近いのかな？ 恋愛ではないな。その他？ まあ、そんな感じですよ。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1978e/>

カーネーションとインチョと腹ペこな俺

2009年3月24日09時35分発行